

ともに探す「こと」が重視される。日本社会では「信頼して任せること」が高い価値を持つため、支援者が本人の意思を”想像して代弁“することに抵抗が少ない構造があるのではないかと。しかし障がい者福祉の意思決定支援では、本人の人生は”おまかせ“ではなく、”一緒に考える“対象であるとの片桐さんの言葉は私の心に深く刻まれました。これまで私は息子の気持ちも十分に考えず、言葉での意思疎通が難しいこともあり、勝手に想像し、先回りしてしまうことがよくありました。文化的背景の違いのせいだけにする気はありませんが、そういうこともあるのかもしれないと自身を振り返る機会となりました。たとえ言葉でのやり取りが困難でも「どんなものが好きなのかな」「どんなことを楽しいと感じるのかな」「これは苦手なのかな」と当事者と向き合いながら思いを巡らせることで支援はふくらんでいくと思うという片桐さんの言葉に、あたりまえのことなのに置き去りにしているなあと思わずにいられませんでした。片桐さんには、ご自身が障がい者福祉に関わることになったきっかけや大切にしている原体験のこと等も話していただきました。貴重なお話でした。私は講演を聴いただけで東京まで来たかいがあった～と思ったのですが…。

第2部のシンポジウムでの社会福祉人高水福祉社会理事長 野口直樹さんのお話には私は瞬く間に引き込まれてしまったのです！野口さんには高水会での意思決定支援の取り組み、特に強度行動障がいのある人（ご家族）への取り組みについて具体的にわかりやすくお話していただきました。強度行動障がいの人は、戦時下や災害時のような状況の中逃げまどっている人のようなものだと言われました。そんな状況にある人達に「食べ物は何が好きですか？」「どんなところに出かけたいですか？」みたいな問いかけは無理があって、まずは本人の安全や生理的欲求をしっかり確保することが必要であり、そうすることで平時の状態に近づくことができる。そうすると意思決定支援がしやすくなると。これを読まれている方は「そんなことは基本的なことやん。」と思われるかもしれませんが、さすが、当たり前なのが日常的に行われているかというとなかなかできていないのではないかと思います。避難場所として逃げてきた入所施設がいっぱいでそこも戦時下だったという笑えない現実もあるということでした。野口さんの法人では、入所施設を終の住処という考え方をせず、入所からグループホーム等に移行させていく取り組みをされています。地域移行した後に、もし何か問題が起たり本人や家族

にとって入所施設に戻った方が良いという事態になったら戻って、本人の意思を反映した地域生活に再びチャレンジできるような仕組みを構築されています。名付けて「シャトル型入所施設」。こんな入所施設がどの地域もあつたらどんなに安心だろうと思いました。野口さんにはぜひ来阪していただき、またお話を聴かせていただく機会があれば良いのにと強く強く願っている次第です。紙面の都合で割愛させていただきますが、シンポジストの社会福祉法人東京都手をつなぐ育成会清瀬育成園 ひだまりの里きよせの安部学さん、社会福祉法人東京都手をつなぐ育成会東京都育成会 権利擁護支援センターの塩谷菜美さんの実践報告も素晴らしかったです。あつという間の3時間でした。

「第5分科会 育成会活動の現状と親の会の新時代～みんなが元気になる秘訣～」

港育成園支部 松村 ユカ



第1部は田中正博さん（国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 理事長）と佐々木桃子さん（全国手をつなぐ育成会連合会 会長）の対談でした。全国の育成会会員の減少をどう止められるか。そして今後の取り組むべき方向等についてお二人のやりわり、ほんわかしたムードで進行されました。

第2部はシンポジウム形式で行われました。シンポジストとして白石美加さん（目黒区手をつなぐ親の会 会長）、高橋久美子さん（浜松市浜松手をつなぐ育成会 副会長）、江村 恵子さん（群馬県手をつなぐ育成会 会長）の3名、第1部からの流れで、ファシリテーター田中正博さん、コーディネーターに佐々木桃子さん、新たにコメンテーターとして野澤弘さん（植草学園大学 副学長・教授（一社）スローコミュニケーション代表）の6名でした。

皆さんのそれぞれの活動を聞いて思ったことは、良い意味で「取り組んでいる」ということでした。大阪市と違い人口も遥に多く、教育委員会、支援学校（P